袖珍抄

芭蕉翁傳来一巻

へ 5
4649

門へ6
巻 4649

昭和十六年一月十一日寄贈
尼野貴英氏

袖珍抄

連歌手紙作法大事

切字之事

・かな

・えこのか

・らり

・きりな

・らん

・もなし

・り

かる人よ島なく花乃山路へ入る

ほとゝぎすを山なりね聞まほる

陣りり月りなる砂の松乃雪

さえ雲りる浦雪つる春秋庭

いつもらん花乃乃の紫けうす艶

初雪乃庭を山乃紫引なし

雨引なる和歌をべ初ゝる初ざゝ

・の
・や
・やハ
・のい
・ゆり
・ころ
・いうま
・いう
・ゆり
・いく

秋うわし　露の紅葉ちるこゝち
露の色とるる乃木末ち朝ほの〳〵を
おもぎたる　ゆい初のうち紅さ庵ゝ
花ひのゝ　あまこ三のいと木青れム
雪よりも　繁まさりげゝり夏乃色
花いろ月　けやまこゝちち志賀ち潟
月いうま　木のりゝゆゝ乃　松ん雨
秋のゝを　をいまゝりふこゞわゝゝそ
ゝゝたゝ　あゝの玉をハ川　玉乃苔
霜ち色び　雪ゆゝをいくよ　ゝる紅松

ふ
は
如

さゞのたゆけれ　卯乃花月　秋なゝぎた
花いろつ　青葉み　玉きれ乃蒙
雪の花　青葉ゝなり　ね松ん風

北斗

ゝゝ・ゝ乃・ゝと・む・ゝゝ・ゝん・いつ
ゝゝ・ゝゝゝ・いさ・よ・いゝ・ゝゝゝ・下紅
ゝちゝ・紅玉乃・ゝ

△下紅之事

ゝよ　ゝわ出よ花ゝゝ乃わ花春ん　あわ

・つくせ　うちつくせ紅葉むらこそ所もなけれ

・すて　よわし出くるこゝろ紙ぞ雪ふん　梅

・ふけ　ぬけ蕚花なれ去乃夏来ぶら

・こかを　おも繼ぐこさるぐら上み乃雪

・ふゝる　さうぬまゆふ春ふ雪

・わ　むわぐ多紙ぬぐ舟にあ朝花

・ちゝせ・見よ・かをわ月

・太切字近代仮例用ゝ淀紙秀白ゝ内出来ゝ時

・用旧例ゝ

切字ゝ〳〵　文字三世の〳〵文字の内色去れ〳〵

文字ゝゝは不切

・歓左ゝ〳〵　一夢みゝゝ

・来ゝ〳〵　夢ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

仝

△雲物之發句之事

松ゝゝ〳〵あゝ〳〵雪みこのゝゝむゝゝ

水ゝゝむ〳〵山や雪ゝゝゝゝゝゝゝゝ

月かゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

名ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

太・志・う・や の別と云是也 上四は加字之者
現在の「や」の字「ん」とあり已上三ツあり又うれ
字入れども「や」と切るなれども「ね」る日玄妙の義句なり是
によりて志うやのてよんといへり
「きのふより山れ櫛立」「寒むらん」未来
此義句も玄妙之
「ひろごの」香みきうえなる雪如句めん
こと玄妙の義句乃よしまんども加字切ごとてよきえ
あねの字更み玄妙乃四五不関に失念うとあるや
△大廻之事

「あれ」うとうとする日れこぐ雲川潟
「雲」なる如風たんみちゆく れ乃月
此切字加て加義句なりと上下の分別あれうう
とあれば下五音津潟とあり うれ和合れ大意之雲なる
と云下句と有月義れ義句なり
△三段切之事 三点切とも云
「花」ひも・柳なる髪れ雲川風
「さみだれ」は・津乃れ風・谷ちんあ
此義句柳と附津風とんで古れ和二ツいるてより
文字なるに三段乃切字なるもんと岩と谷と文

字とりふれ上三ッ有さてあそ三段切とはいふなり

三字切之事

「すゞしさもつるあらしやとえん夏座
「花のとよけれつゝれ松乃雪

右三段句ものるとやとを添字と三ッ切字といふ也

又つゝらとよつそれば三字あるによりて大切也

△三字切之事

撰人も花みゝらん風もなし
「ゆめや川のえ家袖ぬれてけつる

右三段句ゝらんとも切としてゝ二字切なり又

やとかなと是二ッ切也

△大廻ゐ不成句之事

「撰人ハゆらハ都のやどの滝の月

是ゟ夕ぐらと見て下ゐ本と有る首尾せん人

撰ぐらの文字ひかし也

△かなと不留段句之事

「みやこより本の葉ぬきこぬ嵐かな

是ハ中さこぬおろしうとつゞの句人

てまゝけちがしまて不達事

「みけやむ糸ん花とりうこの御にほひ

月やあらぬ　秋やとき　神なびたちをる夏の月

此句やといひてのること　此句の中に

いろやの字やかとなくとも　はやの字ばかりも

なるべし　月やあらぬ　秋やとき　此二句い新やうえんよ

といひたわるる詞なれとも

切字にそなる字あれどのるもてるもふたる為る

ありをさん字といふる

さいかをよ　秀句

△うちよれこ字ましてとる為る事

・う　うきみだりとおもふ　洞み芝推て

・この　里人のふいるりと雪ふるうく

・よ　みよとハ小さむるなさけふいひ推て

うと

誰神うらうらやまさのあるひ

見ハたの神ぞといひてこうると為る事てはちる

ふるもうらう山風をうらやまと為る事　秀句ふいひのけ

△ある人みうのとと　思習いづまると　のこと

小秀句　此字入ぐてとるこうるもるや

△哉ふこのふ字之事

てには かな 此類をかゝる字なり
△うたがひのやハ切字之事
△はさみやの事 △しやこもよ
立のぼる雲や霞み日のいりて
山さとハ雪や木のえだにそえて
此やの字雪と木とをよくしきおもふやの字を
さみいるれいてとあるやての字になしてひ背名
くみえてと有は雪木乃葉にみちきえうるやと雲
霞に日の入てうるやいのふくみてしきてそれてそ
こゝるとるしなくひあくるてるてとハ雑高下や

△九やといふ事
曉のあらしや一つの雨ふ夢覚て
屋みけさ木のそや風林落葉て
かりはそらむとぶや月のうらに寝よ
是ハおらじわの五文字より九つめのや乃字や此やに
てハてとめるや
△八乃やの事 △のやとも
東路や はるし路や 春日野や
志賀の浦や 此類やじやうそてハふとまてとまるゑ
川岸や 山松や 山路や 河添や 漆にや

いろはや此歌のやうなるもてるもおるる為也
花ちるやゆ　月ちるやゆ　ちりぬるやゆ
ゑの字ゐ行やしやゆ切字み用ゑ

△七のやうな事

口合のや　又やうん差ゐ世社差あるもうん
切や　ちる花やあゝゝみつまるやうん
中ノや　鳥ゐゑ雲ゑ霞ゑ日乃いろて
捻や　かくてゝも身乃あるべきとろいろや
八のや　人ハとろやゆこゝりと月みゝ鳥鳴て
駄のや　おるゑだやかゝ蛙鳴まどでひゝん

すゑのや　おるゑやとあゝ歌も人をうゝどゐて

仏上七ッや

又文字より三ちわい口あひのやなりあわい切ルやゝ
八わい中社やん口ちわい角社やゝ又わい八のやゝ又わ
八駄社やん顔やい捻やなりう
よるもあゝゝ　おるもうゝ　ちゝまゝ
ごハゝゝ　おゝ角ゝ　ちゝせゝ
此ゝ文字切字や
霜ゑうん　あすゝる行ん　ひとゝ行字切字ゝ
花をうんもは

「霜がれとハかれ野 秋乃草
「あすも枯ん霜ハひもとく草むら
「霜とハ「草とハ「山とハ などしるとくみ
となるハ不切(ぞうきれ)、花とハ寿るとハ君とハするといふ
ものなり
「草をとハ秋草ともかれ木雅ら
この中にあるただひハ不切(ぞきれ)にとりて取ると
為りアト草花見るべき秋草と未来(みらい)を
ふみよりそ乃事之「月ハとハ「月すはみえ
しまおれしく縁なり

△かてとまる押字(をじ)之事

•を　風もなき荻(とぎ)を「寝覚(ねざめ)乃枕(まくら)まて
•ハ　又よその堀川(ほりかは)のちれなきとみゆく
•ど　とくてあふなしひのあるぞ「哀(あはれ)まて
•も　いはりみおもふとしふ「まうらとまて
•かね　惑(まよ)ひさへ身(み)をおしかりね「命(いのち)まて

例
「袖まふそちぎる草おる秋(の)分(わけ)
「出りこそ人まのげせし花ちるまて
「道お種だ出そこのうれしくあるうら

太さそとしひとふるもみてるを山のなり
こうあれとあてにあ申て作る白なり
十九てみをはとつなりに作
△いつのてとつ事
さびさりいづまたよしゝ紙とありまて
古にいはこむのしたあをしゝて
春日なるいつは都乃原にきて
太いづまを其拍をさ一定るさ法なるもへ
てゝあるこの法のこの拍いつの乃都すてあるゝ今
雪紙分をつかてゝ也也何も太白日本

△義白みふるあるもてゝ白之皇
梅こそく香紙をれ乃なのれ
れ流く根りの芹山野法
太乃白なの程拍程治定しある白之
うの義白之まもて仕身之みすてこあせねのなう
又義白はゝふまをたびひるゝ佛へとてこそ
ゝこゝこのてるさろなり昼すてはすて面不若ト紙
ゝ義白吟味ト身之之事評要也
△三世のしは事太ゝも太ゝ出ゝ作
みえ　きゝ　白

太異い切字みな〳〵濁んとする事
不審

△現在のしとつゝい

ふとそ〳〵　松むし　さむし

太こゝ強い切字みな濁る

△未来のしとつゝい

ちぎるべし　夢めべし　夢めべし

ちるべし　かこはべし

太切字になりゝとゝやゝ

△下に句て留る事　大原山と押てとゝ留るゝ

蛙とゝやゝみな濁ハのこりて

松みちぶまるゝ　ゆみをこのてゝ

おりのぼりてうゝ月ハこゝをこゝて

以上此乃類なり　但をとゝ字ヲ上ヨリ十字目に置なり

△就句中の字ニしてゝ濁る事

後人のみしとゝ名ヲ玄異や

鶯ゝうゝて　長閑すてハ　のどゝふ　鶯ゝとゝ事み

てゝとゝ句中ニ濁ハ極て少ク

△とゝ字遠ニ事

在老義ハ

ありとてん物とゝ身とゝやはるゝん

はとゝ字ニてみをとゝちぶのひとゝし其ハ有とゝんの

しそ丹ハせるとぬまそ稀へばくるゝ時や
いとつしてとそ稀ねどとそ稀字てふと遠しとゝ

△ぬ留之事

天地もうゑぬいたるやとまのびきね
かやうまとてはぬと留事皆べこゝばゝあ発に
ちるうゑぬいたるやとどのうまそねと留うへばく
ゆこうばゝかやうまとるすゝゝ

△ふのぬとゝ道あゝハまそね切やゝぬ
出ましては切りさばゝ花さうね拂いね
古同歌

△をうんぬと云ハ花ちりぬ 色なうぬ
月いうぬ
出しのぬまそは切りゝ

△かく被ぬとゝハきゝうぬ かちぬ
出此乃類ゝ去ゝ方へいとうとなり

△ぬ孔分別之事

雪ありて道あゝハ被ぬ冬乃山
留ゝうゑてゝあゝりぬ春ゝ山
是ハをうんぬと切ゝる是別て皆ゝ文ゝ家
にうて切ざるゝ皆べゝゝ

△一字そろふ事　[illegible]

見しは初字なくんとても若くばと

△さしのらんとふい活字てしる所なきもの

物をうたをよみつをてる所なきもの

明るすぐうくふるもあるこねるん

かはるき意しに雪ふきかるん

いとかたあとしねぐたるるん

出典やといとぐらんと有こ有のこけるる

事ありよくく分別みぐし

現在のしゑ字そはもぬるなり

△かさ行らんの事

[illegible]ぐらたちるん抱乃白[illegible]

[illegible]るるん[illegible]るるしるや義ぬん

不好ども自然乃無なり

△二字をれとふい系句ぬやを結てるる事有

△三字くハてふハ三日はなどに百と休み老こと

[illegible]の表なぐ付る事なり

老をそれすむ行を捨るいざ

[illegible]表とそれうぐ意くく落筆て

足して不[illegible]有二
法分別しや

△四字不ぽと云ハ系句の系
　松と岩とあるに風と波と付る史
△すべてのてふたる事
　古へ高行実ハ山風○袖ここそく
　松くるおくハ山岸○日ハさして
山風と袖とあるにてハ句なり
日とあるにてハ句なり
　お野ゞ事ならし
　著にるあ岩ハ橋ゞ舟しるして
是ハあくゝ一句なるべ系ハ仕べるすべ

のてあるハ水なゝ橋ゞ船ゞ系ハ句なるべ
△りの系句ハ系ハ句ハ付ゞ
△ハ岩上系句乃ハ句なり此二字系をゝ字なれ
てハゝ句ハ
下の句ハ二字なくゝ上系句のハ
ゝ句なるべ
△活字系の事
　夢のゝこの春ハ山むらして
こ系ハ句なるべ
日を今し系ハ山なゝ字なるべ

先ゟ下ト

△こゝ一句は中にあれば

「忌 「け 「せ 「て 「ま 「め 「孫

足額(かん)に置(をき)てよしさるハ様ば不用なり

△見捨留(みすとめ)之事

あさ桜まの花よちよこてちらふ見なる

あれ桜すらや山吹をるく見なる

梅の花一瀬(ひとせ)に漕(こぎ)なでの月見なむ

木(き)の紀含(え)にれそうなり見なゆ

右之几後去此等名は テフ也此等 カヘシドメト 云モノ也

・う

く

す

川

・ね

・ふ

・む

・ゆ

・る

やはらぬもまくぬくらぬ見なる

みぞれは空(そう)に騒(さわぎ)せんとぶ見なゆ

みくさうはきらをはじ見なる

うへなる山に月のる見なる

「やよ志ぐ雑 「やと弥生(やよい)やよ郭公(ほとゝぎす)こそハやいと云也

「さだまらし 「さえねらし 「面てらし

「咲ぬらし 「嵐ぬくらし 「志ぐるらし

「なくならし 「のくらし 「見るらし

「小車らし 「ぬけねらし

ことらんを縁にのりまの字なり

△去のふとて白り

あらはす　かくす　人わたる

此詞同意みなる為り　同人をたのぶとらふ白

にゆうなる又ひきこのゆう乃言葉も同さん

△かもとまり　△このハとゆう孔事

よまるぬを縁孔雲ハたるかうハ

白かもまてにろしこのく宮てる事ハこのまくト

宮まるぬ事ハうもよくんト

はよる多る岑孔雲ハたるねこのも

白ハこのハまてまろしに為ハねこのハ乃有まて

てゆ宵沖分別

△むこのふも

すこよしゆ長井乃演ま紀ま

小篠さん志ばこ作孔ま中ふ

はさんハりふかまなり

△かさ縁又花みとふ事

・重又　又なまて多孔ひまを鹿孔為

・花又　又もこぬ新とおまんばたさはまて

△成りり糯乃入る詞こ孔ま為

中

△八字付不

△皮肉骨付連奇

・上皮

・肉付

・骨付

△真草行之連奇

真　川音さむしろよりの乃毒

猿巻き岩付この付乃書りあんで

仏紙のこの付今るれまとつ

草　あしさの毒乃路紙さりとん

なれれるさ尚付後の里乃書

編句とり付るれまとつ

行　わの毒付とと要よおるきん

中

園よりる雲ふ霧乃書なくて
大ようち今ようち行くて
太真草行一座の内にて者其名
△お奇ことこと仕まつる
名をうらうん出のうち
世中ハ藻ともむし出ん間して
奇あるのうるもんともむしの名うと孫をう
きうち世ハはうこ
秋風さむく紅乃出たれど
ちうこ孫ハおぐとて山ハ月るれ

奇
ちぐのうこ孫なぐさあうの月ハうしをや
おどくこそやはるこそ月ハるく
△お辻連奇
小ちんとて孫ハ浦ハ孫むで
塚のうち生田ハその草のうち
△お歌まき奇
屋ちの稍ハかうりうん
くもぬはうきうるくぐ生弱山
奇 和宮の稍の裏うるまん
いうるみどけハ巻ざうるる

△切句きゝ所

田露をうつす波のうちにあるさ
千鳥は松原のうちにうちて

△異義通射

のりたるところをとうるなくうり
弱よりの草は枯葉み略おりく

△かけてふく

こゝぬれたるやうにおく紅葉
明日はゆべを秋さんうとうに

△きせてよと

きんこのさもあれば物のこゝろさ
霧くゝきさ夕の山乃雨やとり

△このさゝひてよと

木ぬれとうばふなるうとうる
古ゝハとゞれたるうりて物きて

△あうりてよと

ゝあれたる所なるに風乃音
松陰乃あるるさぬさきの夕乃ゝ

△年所發句

ひゞゝとうの松ぬおりん光ぬ雲

・ゑ

・ゑ

右之通ニ仕可申

天文廿四年三月二日　宗牧判

宗養判

長慶朝臣

三好修理大夫長慶

△字書

遠式　なをなを　初を事

おくゆかしき人まつ　花見て

・ゐ　ゐは切字・よはつく字なり

老りてゐきあるこゝろもち　紅葉

・ゐ　ゐは切字・ゐはつく字なり

紅葉　霜　月　ゐるゐさえゐて

・ゐ　ゐは切字・ゐはつく字

出のぶする人はゐるゐ　ゐきゐる

・ゐ　ゐは切字・ゐはつく字なり

△秀句ならぬ字

身をもるまでの草の葉の雪

・うすとしてたゝ切ばりつるまで落こゝろ和

人いつゝ海よりぎの色をよれあり

・よもきつゝとつゝい切ばりつる手をつゝ和

△治定乃歌事

雨のこの木ゝ葉をてきる月哉　出雲

△七文字曲

花ゝ後ゝ見ぬ者ゝ若葉小　兼載

あゝ拙ゝ地ゝあゝそゝる春ゝ　宗牧

紬珍抄終

左判